

蓬萊町だより

会部 町化 蓬文 第 六 号
平成 十 三 年 一 月 二 五 日 行 成
編 集 者 者 者 者 者

『私本、下谷天王寺五重塔炎上』(その二)

日本随筆家協会々員 上野 静

専務は大いに喜び、京子に「これ以上の良縁はない。プロポーズを受け入れることにするが京子も承知してくれるネ」と決めつけるように伝えた。

京子は「大変立派な紳士でした。私には過ぎたお話です。今、少し時間が欲しい」と謙虚に、そして何故か悲しげに哀願し、父を見上げた。この言葉を最後に京子と平吉は杳として姿を消し、消息を絶ってしまった。

驚いたのは父のK専務だった。

直ちに全従業員や関係管理人に協力を要請、総動員体制で捜査を開始した。

特に若い従業員の素早い行動に期待、激励した。平吉は元々、会社に住み込んでいたが成人してからは千住方面から通勤していた。某社員が兼ねて耳にしていたという千住大橋先の農村地帯(当時)の貸間、貸家をターゲツトに全力を集中した。その結果だった。漸やく彼の借部屋を突き止めることが出来たのである。しかし、時、既に遅く、平吉は危険を

察知、逃げ出したアトで蛇の殻もみだった。その後の足取りは全く不明だった。

しかし、京子、平吉の二人は当て所なく都内各所を転々として逃げ回っていることは確かなようだった。父、専務の司令は厳しく追及は猛烈だった。そんな緊急事態が京子を中心に持ち上がっているとは露知らず、真心を以てデートを続けてきたW大出の紳士は何時までも結論の出ないエンドレス・ドラマに不可解な疑念を感じ取ったのである。

K専務は事態の収拾に苦慮し続けたが名案は浮かばなかった。

取り敢えず、三顧の礼を尽し、謝罪することを決断した。

「娘を過信していました。率直に言って最低の娘でした。格式の高いジェントルマン精神に深い傷を負わせたことを心底から謝罪します。私も親子の罪、万死に値する不明の行為でした。呵責なく責め立てて下さい。一千万言を費しても謝罪し尽くせるものではありません。私も老夫婦はこれを機に現役を引退、謹慎生活に入ります。どうか、一刻も早く不快感から脱却し、益々、ご活躍なされ、志を達成なされることを心からお祈りします」と真情を吐露して謝った。

紳士はサスガ、立派な偉丈夫で「ご心配には及びません。青春の楽しい夢をみて私は幸せでした。これで私もスッキリした。

総てを水に流し、リニューアルな私として再

スターとします。却って余計な心配をかけて申しわけなかった」と淡々と述べた。

K専務はその寛大で美しく情緒豊かで率直な心の紳士に心から敬意を表明した。

後日、有能な彼は東海有数の大製紙会社の専務としてNo.2の重責を果し、若き将来のホープとして嘱望されるに至ったということだ。

閑話休題

K専務が謝罪問題や行方不明のわが娘、京子の捜索などに心身を磨り減らしていた某日、一通の手紙が配達されてきた。

幸せな人生とは心と心が融け合い、お互いのフィリングがマッチして日々の生活が楽しく充実していることだと思えます。

お父さんの望む高学歴の紳士も結構だと思えます。しかし、私はお父さんの最も嫌いな無学歴で下層階級(当時)の運転手を選んでしまいました。しかし、私は今が最高に幸せです。お父さん達は私達を引き裂いて幸せを打ち壊そうとしています。

そんなお話は絶対にNOです。

『瀬を早み、岩にせかれる滝川の

割れても 末に逢はんとぞ思う』

お正月になると私と私の女学校時代の学友二、三名を呼び、お父さんやお母さんと百人一首を取り合って楽しく、遊びましたネ。

この和歌こそ、真実の愛を謳ったものだと思います。お父さんもよく、読み手になって歌ってくれましたネ。思い出して下さい。

私は彼の愛を信じ、何処までも従いてゆきます。お父さんもお母さんも私は始めから「いなかっただ者」と思つて下さい。

そして、もうこれ以上、私達を追い回さないで下さい。

というニュアンスの手紙だった。

最後に京子とは書いてあつたが住所は空白だった。

用意周到、綿密に組み立てた行動で

最早、両親とは断絶を示唆する覚悟の知らせだった。

サスガ強気のK専務も愛する京子の

悲壮な決意に唯々、呆然とするばかりだった。

このような親子の悲しい不幸を仕掛けたのは孤児を哀れみ、手塩にかけて育てた平吉だ。

K専務の

平吉憎しの怒りは心頭に発した。

平吉追討狼火は

激しい勢いで燃え上がった。

二人はK専務の執拗な猛追で都内、郊外を逃げ回り

心身ともに耗弱し

生活資金も枯渇した。

退路を絶たれてしまった二人は

進むも地獄、退くも地獄

進退、ここに極まった。

万事 休矣。

京子、平吉は最早、これまでと

覚悟を決めたの

二人は曾て京子が幼い頃

好んで遊んだ

懐かしの下谷、五重塔に

慕い寄つた

此処が先途野宿と決め

黄泉の旅路に

発つことを決意したものだつた。

付近に散乱した木片、

木の葉などを

掻き集め、せめてもの宴に

僅かな焚火で

酒肴を作り

お酒、ビールなどを啣り続け

鬱積した心の暗雲の晴れ間を俟つた

しかし、そんな時は来なかつた。二人は共に日に日に衰弱し、迷走神経は機能を失い、朦朧状態で殆ど意識は失つた。

七月の初夏とはいえ、この日の朝の冷え込みは異常だつた。京子、平吉は相抱いて暖を取つた。残火は朝風に煽られて燃え広が

り、二人のシルエツトは猛煙の中に消え果て

て、この世の愛の終わりを告げたのだつた。

火勢は強風を伴い、炎々と燃え盛り、名刹、

天王寺、五重塔はここに炎上、姿を消したの

だつた。ピシピシと異様な音を立てて燃り続

ける余燼の中に横たわる残骸の前で地面に跪

き、手を合わせ、嗚咽、慟哭する二人の老夫

妻の姿があつた。

それは年老いたK専務夫妻の悲しげな悔悟の哀れな後ろ姿だつた。

昭和二十二年七月某日、未明の悲劇のアクシデントだつた。

註

寛永八年創建以来、江戸市民に親しまれた五重塔だつた。

地震、火災などの天変地異に依り、幾度か

炎上、焼失した。しかし、市民に惜しまれて

その都度、復元、再建されてきた。

長い歴史と伝統の中に幾多の名作やロマンを生み、江戸のシンボルとして天空高く聳え立ち、豪壮な威容を誇つてきた五重塔だつた。

今は、しかし、跡地に鉄柵を回らし、その名跡を讃え。伝統の文化を刻み、後世に伝える

モニュメントが平素は墓参客を除き、訪れる

人影はマバラで蓬々とした雑草に囲まれて秘

やかに光彩を放つているのみである。

しかし、そんな跡地だけに年に二、三回は文

京区、台東区などの連合商店会の富籤抽選会

や骨董品、陶磁器、植木市などのイベントに

使用され、この日だけは雑踏の人集りで華麗

な往時の面影を偲はせている。……以上。



筆者略歴 昭和十二年早大卒業(商)

主婦の友、理研重工業、帝國データーバンクなどを歴任、二十二年サクラヤ商品布を設立、平成十二年十二月解散、今日に及ぶ。

参考文献 文京区立鳴外国書館蔵書

町会活動の概要

平成十三年六月から
平成十三年十月まで

総務部

- 6/12 部長会 正副会長、総務、会計、監事、各部長出席
- 6/16 定期総会、懇親会
於 かねこ 23名出席
- 8/19、20 盆踊り大会

婦人部

- 6/21 向丘地区町会連合会婦人部施設見学会 4名参加
- 6/27 本郷清掃事業協力会総会
於 弥生会館
優良会員表彰者 池田朝子氏
高橋康子氏
- 7/23 根津神社つじ苑 除草 5名参加
- 8/16・18 盆踊り練習日

- 9/13 敬老のお祝いの品を届ける
- 9/21 交通安全街頭活動 かねこ前交差点
- 9/27 日赤献血奉仕活動 本郷郵便局
- 10/1 赤い羽根協同募金
二八一件 ¥二〇二、三〇〇
御協力有り難う御座いました
- 10/2 本郷消防署 普通救急救命講習会
- 10/24 日赤献血奉仕活動
- 10/25 本郷消防署 防火女性部視察研修会

交通部

- 9/3 駒込交通安全協会理事会
於 駒込警察署
- 9/21、30 秋の交通安全運動 一〇名参加
- 10/26 優良運転手表彰 石川琢也氏

防火防災部

- 6/26 災害時連絡担当者研修会

防犯部

- 9/7 駒込防犯協会 全体会議
- 10/12 町内防犯バトロール
午後八時半、八名参加
- 10/13 防犯街頭チラシ配布 上富士交差点
午後三時、四時 五名参加

文化部

- 7/15 「蓬菜町だより」六十号 発行配布

『平成十二年敬老(節目のお祝い)の方々』

(南部) 九名

滝沢 茂	80歳	渡辺キミ子	77歳
古川 釗	90歳	関根 鈴枝	91歳
伊藤 三郎	77歳	塚田 マツ	95歳
鈴木 俊定	77歳	真下みや子	77歳
		翁 めつる	91歳

(中部) 十六名

益子 了介	88歳	増田富美枝	88歳
山路善三郎	88歳	露久保トヨ	80歳
神保 三郎	80歳	清水 富枝	80歳
河内 威	80歳	原 ハルイ	91歳
亀田 源次	80歳	菊地 邦	80歳
小山 信次	96歳	加藤キクエ	77歳
清水 康政	94歳	萩田ハツエ	88歳
吉田喜三郎	88歳	高畑 道子	80歳

(北部) 九名

小林佐一郎	92歳	井口スナヲ	90歳
日色 吾平	77歳	森田 たつ	92歳
青木 武男	88歳	島田 たか	88歳
高島 正義	90歳	豊田 スエ	91歳
高村 竹雄	90歳		
喜寿(77歳)六名、傘寿(80歳)八名 米寿(88歳)七名、卒寿(90歳)四名 91歳以上 九名、 男性 十七名 女性十七名			

(平成十三年九月 婦人部)

蓬萊町恒例「盆踊り大会」

実行委員 中島 行雄

根津様の本祭りの次の年に恒例として催される「盆踊り」が今年も賑々しく開かれました。

初日の八月十九日は好天に恵まれ、実行委員他町内の方々のご協力で資材の搬入、矢倉つくり、屋台、ゲームの設置、等々、順調に進み、昼過ぎには無事準備できました。

定刻の午後六時、焼きそばの無料サービスで開幕。屋台、ゲームの店にも三々五々人が集まり、七時から踊りの輪が動き始めました。夏の夜のひと時、老いも若きも和やかに楽しい交歓の広場でした。

二日も焼きそばの無料サービスから始まり前日に勝る人出でしたが、台風が接近している予報でしたので終演を少し早め、抽選会で会場を盛り上げました。

翌日の悪天候を考え、修了後、サーチライトを使つての施設の撤収作業が行われました。夜遅くまでお手伝い下さつた皆様には心から御礼申し上げます。

なお、「踊り」の輪に入つていただく方がもう少し多い方が良かったのでは、との声がありましたので、次回にはその改善策を考えてみたいと思ひます。



計報

当町会の方で平成十三年六月〜十三年十月に逝去された方は左記の通りです。謹んでご冥福をお祈りいたします。

- 橋口泰三 様(八二才) 向丘二一八―
- 今井彬彦 様(八五才) 向丘二一八―三
- 平出せい 様(八九才) 向丘二二七―八
- 水谷 保 様(八一才) 向丘二二三〇―四
- 谷口康孝 様(七七才) 向丘二二七―六

蓬萊句壇

栗飯や母に届けし昼陽中
どん尻を駆ける児肥えて運動会
栗むけぬ指のしびれが悲しくて
そぞろ寒いまだ我が家へ帰れずに

箏日の波跡に散る木の葉かな
野仏に捧げる花は曼珠沙華
段ボール三つ潰して秋意かな
国三つ十国峠秋の雲

事件事故多き世に生きそぞろ寒
秋日和ソファを滑る保健の書
栗の皮剥き了へしとき夕がらす
宵闇や波の雄叫び増すばかり

紫陽花の叢り咲きて木戸狭し
夏に病みて子規の痛みを少し知る
そぞろ寒ちかりちかりと遠ネオン
尿意来てすり抜けて行くそぞろ寒

粟拾う山に倒幕志上の墓
新酒酌む宿は出湯の米処
紅葉狩り話の戸口探りつつ
福沢忌大森流をなぞるべし

（大森流とは居合道の流儀の一派で福沢諭吉が習っていた）
大野分け東西南北出入り口
墓洗う墓は無漏路の一里塚
もてなしは一碗の茶と丹波柴
宵闇の暖簾くぐりて京泊まり

岩室 夢雨
小野 向雪
池田 連木

編集後記

二ユーヨークのマンハッタンを襲つたテロ事件は世界中を震撼させました。あの様な手段で人が人を抹消する事を考え、そして実行した基に宗教が関わつて居るのが不気味です。

日本を始め先進国では人口が激減している反面、世界の総人口は増加して数年後には食糧危機が来ると予測されて居ます。飽食時代を謳歌している現代人も心を引締めなければいけません。

最近、たまたま開いた「季寄せ」に佐藤紅緑のこんな句を見つけました。
『春待つや空美しき国に来て』
事多き二千一年も残り少なく成りましたが来年こそ良き年で有ります様に皆々元気で頑張りますしよ。

編集委員 三宅栄三 竹中俊之 常岡 裕
青木喜一 池田 暉

